幼小通信[※1]「３分くらいで読める遊びの話」　2024年11月29日(金)　山形県教育委員会　vol.0007

3分くらいで読める遊びの話

生活を豊かにする子供 遊びの質

5歳児の環境とは？

5歳児６月～11月「田んぼごっこ」

②田んぼ（泥場）をとても大切にしていたM児の思いを改めて感じた保育者は、知人の農業関係者にお願いをし、本物のバケツ苗を幼稚園に届けてもらい、M児に提案してみることに。それを見たM児はものすごく喜び、「バケツじゃなくて『田んぼ』でやりたいな」と言った。③「他の学年の友達も泥場で遊ぶから」と、M児たちは園にある道具で苗用に柵を組立てた。④毎日いろいろな遊びをしながらも、田んぼ（の水の量）を気にかけながら過ごす子供たち。

⑤降園する前には必ず田んぼ（泥場）に寄り、水を足す子供たち。⑥田んぼに水を流し込む機械をつくって遊ぶ子供たち。⑦実が大きくなってきたころ、M児たちは園の職員（作業員さん）に「がんじょうなさくをつくってください」とお願いに行った。

⑧田んぼのことを毎日気にかけながら遊ぶM児。この日は友達と一緒に「カタツムリマンション」づくりに夢中。友達と一緒に遊びを進めるM児の姿が多く見られるようになる。⑨本当に実り、迎えた稲刈りの日。保育者は、特にお世話してあげることもしなかったため、ただの泥場で、こんなにしっかり育ったことに驚き、感動し、そして笑いが止まらなかった。「みんな一本ずつ取って（刈って）いいよ」とM児たちからの提案。大事なお米だからみんなも慎重にハサミでちょきん！⑩園行事、誕生日会の日。「10月はかかしも誕生日だから一緒にお祝いして」とM児。みんなも大賛成。⑪図鑑で調べて、脱穀に、もみすり。２分の１合程のお米となった。

①しばらく歩き回った後「ぼくもう１回つくる」と、水を溜めはじめたM児と、その様子を神妙な面持ちで見守る友達。

子供のここがすごい ー知的好奇心の広がりー

「冬にもお米つくれるかなあ」「忙しくなるなあ、小学校に行ったらまたお米づくりしに来よう」稲刈り後のまっさらな泥場に集まり、M児たちが話をしていました。

子供の表情や仕草、言葉を頼りに、その子たちの興味や関心にどこまでも寄り添い、遊びが十分に繰り返され、発展することを願い、援助した保育者。受容的・肯定的な援助の中で子供たちは絶えず試し、起こる事象を楽しみ、その度に自身の好奇心を広げ、生活全体を自ら豊かに潤していきました。

ちょこっとメモ

「自園の年長児は、毎日鬼ごっこやサッカーをしている感じで、確かに楽しそうだし、自分たちでルールをつくりながら遊んではいるけど、これでよいのかと、悩むときがある」保育参観に伺うと、このように５歳児の援助に悩む保育者の方とよく出会います。鬼ごっこ等自体が質の低い遊びという訳ではないでしょう。しかしながら、毎日漠然と繰り返している状況、子供が集ってはいるものの特に展開のない状況、ましては遊びを通して個々の育ちが見られない状況に対して抱いたこのような保育者の問いは、幼児教育の基本・重点である「環境を通した教育」「遊びを通した総合的な指導」の本質に迫る、大変価値のあるものです。

一般的に５歳児と言えば「繰り返し対象に関わりながら友達と共に自らの生活を創り出していく時期」です。一方で、目新しく魅力的だった園の環境にもすっかり慣れ「遊びがよく停滞する時期」とも言えます。見た目は落ち着いて仲良く遊んでいるように見えても、実は遊びが停滞しているという状況はむしろ珍しくないのです。遊びの停滞が人間関係の固定化に繋がることもあるでしょう。だからといって保育者が先走って遊びの展開を先導していくものではありませんが、大切なことは「この時期の子供たちの発達に必要な体験としては乏しい状況が続いているのでは？」と日々問い直し、見極めようとする保育者としての構えです。

遊びはパターン化してしまうことによりマンネリ状態になるため、あるる種「新しさ」を随時取り込み、より面白くする『プロセス』が重要となります。それは時に子供だけでは難しく大人の援助が必要となり、そこにこそ保育者最大の存在意義があるのです。実は直面している「発達的な課題」を見取り、伸びるために必要な環境の在り方を探りましょう。

やりたいように試し、何かを見付け、何かが分かることの喜びを感じる。このプロセスが繰り返される中で育まれた「もの・ひと・ことと関わり続ける意欲や態度」は、この子たちの学びの基盤となっていくのです。

アンケートご協力のお願い　右の２次元コードを読み取るかクリックで回答をお願いします　ココです。

発行元 お問合せ先　山形県教育局義務教育課
☎023-630-3416　kuraokat@pref.yamagata.jp

※１：本通信における「幼小」は、「幼児教育と小学校教育」の略称として使用